

〈論文〉

プロジェクト型授業による 社会人基礎力向上の取り組み

－ブライダルフィールドで学ぶ学生を例として－

増田 榮美

1. はじめに

本論考は、上田女子短期大学総合文化学科のブライダルフィールドにおけるプロジェクト型授業による取り組みを検証し、成果と課題を明らかにするものである。

「社会人基礎力」とは「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱しているものである。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力と12の能力要素から構成されている。企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための社会人基礎力を意識的に育成していくことが今まで以上に重要であるとしている。

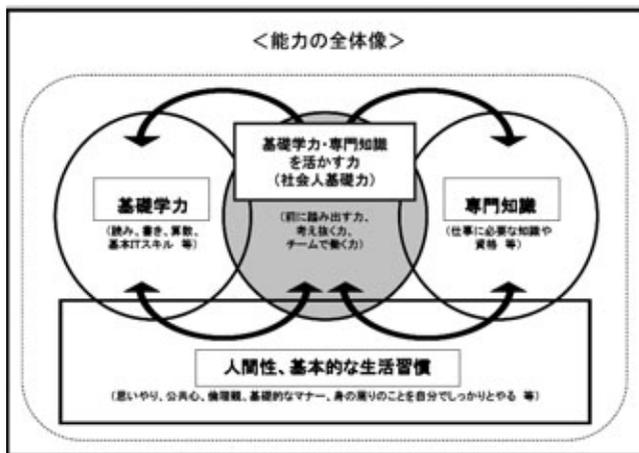
図1-1 社会人基礎力構成要素



出典 経済産業省ホームページより

平成22年6月に経済産業省が行った『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査』によると、企業が「学生に求める能力要素」と、学生が「企業で求められていると考える能力要素」には大きな差異が見られることがわかっている。詳細は考察で記すが、企業が求めている能力要素はコミュニケーション力や主体性であり学生に対して足りないとも感じている一方、学生は既に備わっていると考えている。このような企業と学生の間にできた溝を埋めることが肝要であるが、企業が求める能力要素を正課の授業で身に付けさせるのは難しいのが現状である。

図1-2 社会人基礎力全体像



出典 経済産業省ホームページより

経済産業省の「社会人基礎力研究会中間取りまとめ」によると、学校において従来、正課の授業で学力や専門知識を養成し社会人基礎力を育成する効果も上げられていたと考えられていたが、若者の社会人基礎力のばらつきが拡大¹⁾する中、従来同様の教育手法では効果が期待しにくくなっているとしている。これに対応するため、昨今ではキャリア教育やプロジェクト型授業等、従来以上に現実の課題の解決との関連付けを行った教育手法を導入する学校が増加している²⁾。

本学においても、図書館司書課程やブライダル課程などの専門職過程で学ぶ学生は、専門職に関連したボランティア活動やサークル活動、インターンシップ、実践的授業

など、自分で考えて何かを体験することが職業理解の深化や職業的社会化につながったことが示唆されている³⁾。特にブライダル課程では、実践的授業や学内外での活動を経験した学生は、社会で汎用可能な知識を身に付けることができ、自己肯定感による自信につながっている。

このようなことから、プロジェクト型授業の試みとして平成20年度から取り入れているブライダル課程に開講している「ウェディングセレモニー」の現状と課題を検証し、今後の社会人基礎力向上についての取り組みの一助としたい。

2. プロジェクト型授業「ウェディングセレモニー」の概要

平成20年度から、ブライダルフィールドで学ぶ学生を対象としたプロジェクト型の授業「ウェディングセレモニー」を2年次後期に取り入れている。1年次から座学で学んできた結婚式についてのノウハウを生かしてプランニングをし、それを具現化する授業で、具体的には、ブライダル学習の集大成として学生たちが企画した模擬挙式・披露宴（以下 模擬結婚式）を実際に婚礼会場で実演するというものである。卒業を目前にした時期に実施することもありブライダルフィールドの卒業制作という位置づけにもなっている。

授業は全15回で、企画立案や準備、リハーサルまでを行う。最初の2コマで授業概要説明とプランニングについての講義を行い、その後グループ化して結婚식을企画し、グループ毎にプレゼンテーションを行ってテーマ決定に至る。ブライダルコーディネーター役を初めバンケットマネージャーや音響・照明、新郎新婦などさまざまな役割があるが、それらは全て受講生全員で分担することになっている。配役後は役割に応じて準備を行い15回目の授業時にリハーサルを実施する。その後授業時間外の1日を使ってアウトキャンパスにて結婚式を実演する。評価は授業中の参加態度や貢献度などを加味しながら、当日の行動力やコミュニケーション力、他者への配慮ができているか、全体を客観的に把握する力、チームワークなど、社会人基礎力を構成する3つの能力について総合的に判断する。

企画や準備、当日の運営を全て学生たちのみで行ってもらうため、学生個々人が納得して自ら行動することが肝要である。さらに、与えられた職務を果たすという責任

感が求められる。そのため、企画立案の段階から学生主体で考えさせることが重要で、グループワークを行い結婚式内容について話し合ってもらうことにしている。そして、グループ毎にプレゼンテーションを行い、コンペティションを経て結婚式のテーマを決定する。テーマに選ばれたグループのリーダーが、その後のすべての責任者として授業の運営も行う。発表会当日の役割のみならず、準備段階においても役割分担をするため、授業では皆から選ばれたリーダーが主導して配役や演出内容の具体化、タイムスケジュールの作成、小道具や装飾品の制作などを行い準備する。その結果、学生自ら納得して行動することにつながり、自分自身に与えられた仕事に責任を持つようになると考えている。準備段階でも役割に応じてグループ化し、それぞれにリーダーを選出してもらうことで、さまざまな意見を出し合いながらよりよい方法を見つけ出すことにつながっている。教員に指示され与えられた仕事ではなく、学生リーダーから指示されていることで素直に従う上、指示待ち型ではなく自ら考えることにつながる。学生同士であるため、迷惑をかけられないという気持ちもあり主体性が生まれると考えられる。

このような学外での施設を利用してプロジェクトを実施する場合、民間企業に対して協賛を依頼し、学生中心に企画、実演することにご理解いただいた上で当日の運営に対しての協力が不可欠である。そのためこの授業では、指導教員が予め会場施設に趣旨を説明し、同意を得るようにし、その後学生代表者が会場責任者とタイムスケジュールを基に打ち合わせをしている。学生たちが考えた演出や会場レイアウトなどを、全体のテーマを理解してもらいながら相手に的確に伝えることは難しいことであり、現実的には実施不可能な演出もあって再考を余儀なくされることもある。しかし、さまざまな困難を乗り越えることで学生は社会人基礎力を身に付け成長し、会場施設の担当者への信頼にもつながるものと考えている。

婚礼に係わる仕事は、新郎新婦にとって一生に一度という思いが強いために、失敗が許されないサービス業であり、ホスピタリティ産業とも言われる。そのためブライダル関連の授業は、専門知識の他、基礎学力やコミュニケーション力、ホスピタリティ、ビジネスマナーなど、社会人として必要とされる教養を身に付けさせる内容を含んでおり、どのような分野に進んでも役に立つと考えている。ウェディングセレモニーは

その集大成として、座学では得られない貴重な体験の場となっていると期待している。

今年度のアウトキャンパスは、平成26年1月27日に軽井沢のゲストハウスで実施した。

3. 授業の様子

授業では、概要、結婚式全体の流れや演出内容、グループワークの実施方法、注意点などを教員から説明したが、学生にとって初めての経験であることから想像がつかない様子であった。そのため、昨年度の模擬結婚式の映像や写真を見せながら説明を加えると、受講生同士で意見や感想を話し合いながら、自分たちの企画を真剣に考えようとする姿勢が見られるようになった。

グループワークは、教員が4人のリーダーを指名して16人を4つのグループに分けて実施することにし、リーダー以外は学生に任せてグループを結成することになっている。グループはすぐに結成され、メンバーは常に行動を共にしている友人同士で構成された。女子学生は日頃からグループで行動するケースが多く、構成メンバーはほとんどの場合いつも同じであるため、グルーピングを学生の自主性に任せれば、いつもと同じメンバーになることは想像がつく。しかし、過年度の授業で、この仲よしグループを壊してグループワークしてもらったところ、コミュニケーションが上手くいかずいい結果が得られなかった。授業の最初の段階で、コミュニケーション力や主体性、実行力などを求めるのではなく、授業を通して養い、身に付けさせることが肝要であると考えに至った。

グループワークでは、学生一人ひとりが意見を出して話し合いに協力し、教科書やインターネットなどを活用して知識や情報を得るなど、グループ全員で協力する体制ができていて、社会人基礎力を育む上での大きな成果であったと感じた。教員に指名されたリーダーも、進行、まとめ役として力を発揮し、期待に応えてくれた。

プレゼンテーションは、パワーポイントを使用し、各グループの持ち時間は15～20分である。それ以外に条件はなく、他にどのようなツールを使用しても構わないことにしているが、各グループで発表の仕方に工夫を凝らし、オリジナリティのあるユニークなプレゼンテーションとなった。レジュメの作成はもちろんのこと、結婚式の進行に合わせて場面ごとに効果的な音楽を流したり、婚礼会場や衣装のイメージを伝える

ために動画を取り入れたり、ウェディングケーキや装飾品のデザインを見せるなど、どれも力作であった。残念だったのは、発表の態度である。リーダーの他は、声が小さく、原稿を読んでいるだけで説得力がなく、顔を上げて聴衆を見渡すこともなかった学生が多く、プレゼンテーションの体をなしていなかった。今後は発表の仕方についての講義を取り入れなければならないと痛感した。

プレゼンテーション後、投票を行い、得票数が多かったチームのテーマが採用される。各自2票のうち、1票は必ず自班以外に投票することとし、残りの1票は自由とした。教員は3票有し、内容、発表態度、独創性による評価を行い投票する。結果は教員の考えていた通りになったが、客観的に判断できる第三者が投票に加わることがより望ましいと感じた。学生たちには、自分たちのプレゼンテーションに自信を持てるようになるまで考えさせており、2票とも自班に投票している学生が少なくなかったからである。今後の課題として、担当教員以外の教員にもプレゼンテーションに出席してもらうことで、客観性が担保できるものと考え、来年度の実施に向けて検討したい。

プレゼンテーション後は、テーマに選ばれたチームのリーダーが中心となって具体化に向けて話し合い、準備していくことになる。グループワークと違い、16人をまとめていかなければならないため、統括リーダーのサポート役としてサブリーダーをつけることにしたところ、立候補がありスムーズに決まった。

準備段階の役割分担と模擬挙式当日の配役を決める際も、統括リーダーとサブリーダーの呼びかけに応え短時間で決定した。徐々に自主性や働きかけ力、実行力といった前に踏み出す力が備わってきたことの表れであることが窺える。

準備段階では役割ごとにグループ化して責任者を決め、統括リーダーとコミュニケーションを取りながら進捗状況や問題点などを報告し解決していく。当初は、統括リーダーが不安そうで頼りなく、教員に頼る姿が目立っていたため心配ではあったが、できるだけ教室を離れて見守ることにした。その結果、自ら課題を発見し、解決に向けて考え、皆に伝える姿が見受けられるようになった。任せることで責任感や自主性、リーダーシップなどが備わり、その姿に刺激を受けて皆が協力するという成果が得られた。

このことから、世代的特徴として指示待ち型であるとの指摘もあるが、教員が学生を信じて任せ、時間をかけることで、自ら考え答えを導き出し行動することができるようになる場合もあるのではないかと推察する。準備の後半では、教員がいなくても授業を開始し、授業時間外でも活動している姿が見受けられるようになった。

進行表が仕上がったところで、教員の引率で統括リーダーとサブリーダー、司会進行役が婚礼施設を訪れ、会場責任者との打ち合わせを行う。初めての社会人との話し合いということで緊張し、敬語を意識するあまり自分の言葉で説明することができず、話の筋道が支離滅裂になることもあった。このような場面では、協賛していただいている婚礼会場に迷惑を掛けるわけにもいかず、教員が手助けをした。しかし、宴会場やブライズルームを見学しながら当日のシミュレーションをするうちに緊張がほぐれ、最後には自ら担当者に提案するまでになった。

核家族化が進み年配者との交流が少なくなり、また、地域社会における世代を超えたつながりが薄れ大人と接することが少なくなっていることで、年長者との会話を苦手とする学生は多い。苦手でなくとも敬語での会話が不得手である学生もいる。基礎学力や専門知識と違い、発信力や会話力は正課の授業では効果が得られにくいことを示唆している。インターンシップやボランティア、学外での授業などが社会参加のレディネスを備えることに効果的であることがわかっているが⁴⁾、社会人基礎力においても同じであるといえる。

最後の授業でリハーサルを行ったが、思うように進行できず、課題や問題点が山積した。学生たちから要請があった場合のみ手助けやアドバイスをしたが、できるだけ口出しをせず見守ることにした。時間内に解決できなかった点は、後日改めてリハーサルを行うことにして、出来上がっていなかった席札やメニューカードなどペーパーアイテムの作成もその時に皆で行うことにした。学生たちは、問題を解決する中で、自分たちに不足していた能力を克服し、目標に向け役割分担を超えて協力する力が生まれたと考えられる。

結局、統括リーダーとサブリーダー、司会進行役は、模擬結婚式前日も終日準備に追われていたようである。また、他の役割の中で、プロフィールやエンドロールなど上映ビデオの制作担当者も、当日の朝までかかって徹夜で仕上げたという。同じ目標

に向かって苦労を重ねる中で、多くの学生に連帯感が生まれ、自分の役割に対する責任感が育まれたことが窺える。

模擬結婚式当日は、会場準備と会場担当者との最終打ち合わせを行い、比較的順調に新郎新婦のヘアメイクや支度に取りかかることができた。しかし、統括リーダーが最終的なチェックを行うと、苦労して制作したウェルカムボードがないことに気が付いた。本人が自宅に持ち帰り忘れてしまったという。統括リーダーとしての責任感からか、涙を浮かべていたが、これまで一生懸命に努力し頑張る姿に共感していた仲間からは、責める言葉はひとつも出てこなかった。

統括リーダーは全体を把握して指示を出す立場であるが、今回は新婦役を兼ねることになっていた。そのため、状況把握が遅れる危険性があり、サブリーダーが代わりに務めることになったのだが、チームで働く力が備わったと感じた。開始時間が少し遅れたものの、全体的には順調で、評価できる内容であった。

主賓の挨拶や乾杯の発声、友人挨拶、余興など、従来通りの内容で実施したため、婚礼に関する知識を習得することにも役立ち、さまざまな役割を協力して演じることで、婚礼会場の職業理解の深化につながったと考えられる。

学生が制作したエンドロールが流れ、模擬結婚式が終了すると皆が一斉に泣き出し、喜びがあった。卒業制作のような位置づけであることも影響しているものと思われるが、皆が同じ目標に向かって協力し、ひとつのものを創り上げることで達成感と充実感が得られたからであると考ええる。自分が携わったプロジェクトを成功させる体験の重要性を感じた。

4. 考 察

平成22年6月に経済産業省が行った『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査』によると、企業が学生に求める能力要素と、学生が企業に求められていると考えている能力要素には大きな差異がみられる。企業は学生に対し、「コミュニケーション力」「主体性」「粘り強さ」など、社会人基礎力の能力要素のうち内面的な能力に不足を感じている一方、学生はそれらの能力要素への意識は低く、それどころか既に身に付けていると考えていることがわかる。

図4-1 自分・学生に不足している能力要素

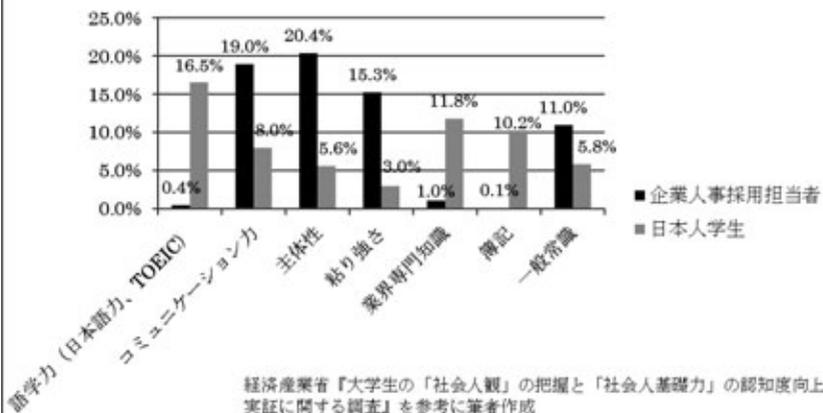
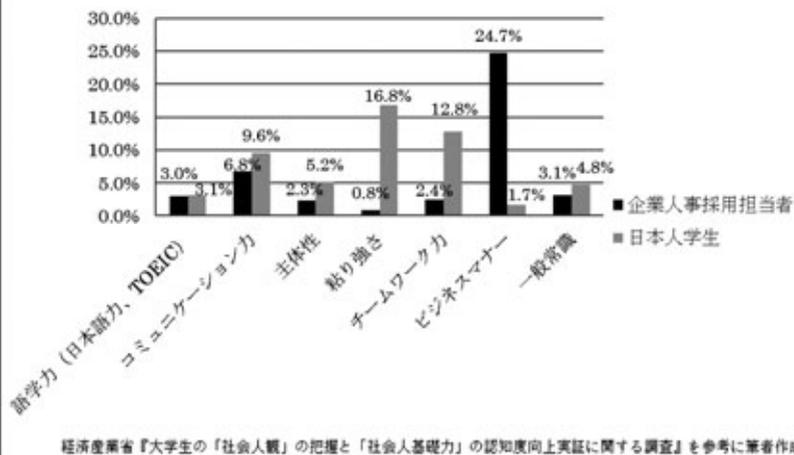
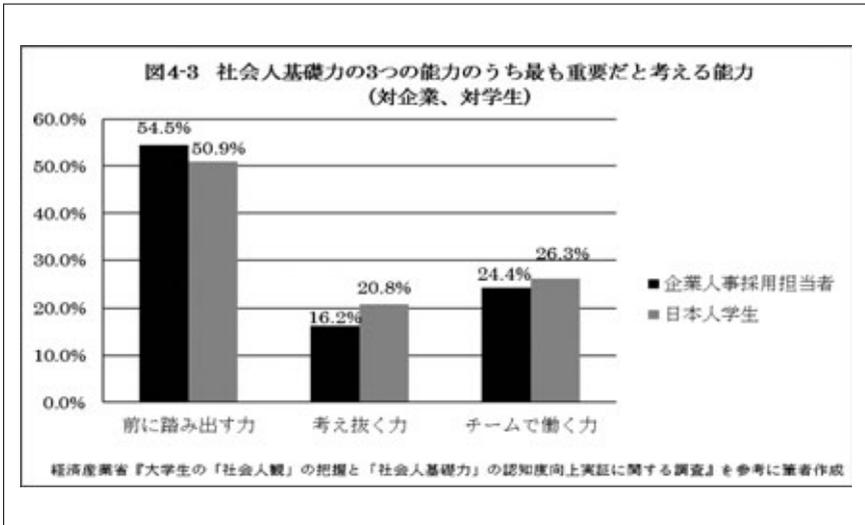


図4-2 学生・自分が既に身に付けていると思う能力要素



企業・学生ともに「社会人基礎力」3つの能力の中では「前に踏み出す力」、12の能力要素の中では「実行力」を重視している。



この調査結果を基に考えれば、企業が学生に不足していると感じている「コミュニケーション力」「主体性」「粘り強さ」を身に付け、さらに社会人基礎力のうち企業が最も重要視している「前に踏み出す力」を備えることができれば、企業から求められる存在になることは間違いない。既に社会に出ている若手社員のうち、活躍している人が共通して持っている能力要素は、「コミュニケーション力」(20.9%)、「人柄(明るさ、素直さ等)」(20.2%)が突出して多く、次いで「主体性」(14.1%)、「粘り強さ」(11.1%)と続いている⁵⁾ことから、これらの能力要素を備えることは、社会に出る上で非常に重要であることが窺える。

本学のプロジェクト型授業「ウェディングセレモニー」では、グループワークやプレゼンテーションを通してコミュニケーション力や主体性、伝える力を身に付けさせている。グループで意見交換をする上では主体性が求められ、いかに自分の意見をわかりやすく伝え、納得してもらうかといった工夫や、意見の食い違いが出た時の摺合せをするためのコミュニケーション力が必要となる。今年度は試みとして、仲の良い仲間同士でグループを結成しワークさせたことで、意見交換や集約がスムーズに行われ、結果的に優れたプレゼンテーションになった。しかし、既に持っている能力以上に伸ばすことができたかどうか疑問の残るところである。今後は、日頃あまり接して

いない学生同士でのグループワークでも、積極的に発言し、活発な意見交換ができるような工夫が必要であろう。

グループワーク後の準備段階では、統括リーダーやサブリーダーを中心に受講生全員がまとまり、仲間との協力体制が取れてチームワークが備わった。遅れているグループの準備作業の手伝いや、問題解決、協力要請などを通して他者への気遣いができるようになり、自分の仕事への責任感も生まれ粘り強くなったと感じる。教員を頼らず学生たち自身で考え解決しようとする姿勢が感じられ、意識に変化が現れたようである。

模擬結婚式当日は予期せぬ問題が発生したが、混乱することなく臨機応変に対処できており、評価に値する。全体を通して滞りなく進められ、模擬とはいえ感動的な結婚式を創り上げたといえよう。ただ、統括リーダーが新婦役になってしまったことで、全体を把握して指示する役割を果たすことができなくなったのは反省点である。しかし、代わりにサブリーダーが自ら進んで統括役となり、精力的に動き回って状況の把握に努め、積極的に指示を出していた。これまでは誰かの指示で動くことが多い学生であったが、リーダーシップを発揮するまでに成長したことを考えると、任せることがいかに重要であるかがわかる。

5. おわりに

模擬結婚式に協賛し、会場を提供してくださったホテルと会場担当者の方々には、貴重な機会を提供していただき大変感謝している。この場を借りて御礼申し上げる。

披露宴のお開きに際して、教員が予期していなかったサプライズがあった。新婦が新婦母親役の学生に披露宴定番のお手紙を読む予定であったが、教員に対する手紙を読み始め、2年間分の思い出とお礼が語られた。受講生全員からの寄せ書きと花束の贈呈もあり、卒業発表として大変有意義な時間であったことが学生たちから告げられた。社会人基礎力をいかに見つけさせるかというテーマのもとに、試行錯誤を重ねて実施してきたプロジェクト型授業であるが、課題は残されているものの、学生にとっては努力した成果が感じられ、達成感、充実感を得られた有意義な科目であったのではないかと感じている。社会人基礎力を身に付けることは、学生自身にとっても将来に渡り汎用可能であるため必要なことではあるが、達成感や充実感が伴ってこそ、身

に付くのではないかと考える。

今回の模擬結婚式では、お開き後、ホールのサービスを担当してくれた女性スタッフが涙を流して感動してくれた。当日の準備段階では学生たちに不安を感じていたそうだが、挙式や披露宴を進行していくうちに各自に責任感が生まれ、皆が生き生きと役割を果たすようになったようである。お開きの際には表情が晴れ晴れとしており、連帯感を味わっていることが伝わってきたという。第三者に感動を与えることができたことは自己肯定感につながり、学生たちにとって大きな自信となることだろう。

今後の課題としては、テーマを決定する際のプレゼンテーションについて、いかに客観性を担保しながら学生の意見を取り入れるかということが挙げられる。第三者が評価（投票）に加わることで客観性が生まれるが、学生たちの納得できる結果が出ないことも想定しなければならないであろう。来年度は試みとして数名の第三者に参加してもらい、結果を検証したいと考えている。

プロジェクト型授業の平成25年度受講生は16人で、半数はブライダル産業や観光業への就職が内定し、残りはアパレルや自動車販売などの接客業への就職を予定している。これらの学生が、授業の成果として身に付けた社会人基礎力を発揮して、社会で大いに活躍してくれることを期待している。

【注】

- 1) 家庭や地域社会については、子供・親・兄弟、祖父母、近隣の人との触れあう機会の減少等により、その教育力の低下が指摘されている。また、経済産業省の調査では、大学時代に部活動やサークル活動に全く参加しない学生が約4割強存在することが明らかになっている（経済産業省「社会人基礎力に関する調査」2005年）。若者を取り巻く環境や友人との関係等の変化の下で、社会人基礎力の育成についてばらつきが拡大しやすい状況が生じているのではないかと考えられる。
- 2) 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会～中間取りまとめ～」H18.1.
- 3) 木内公一郎、増田榮美共著「短期大学生の職業意識の変化－ブライダル専門学生と司書課程学生の比較研究－」、H24.3、『観光文化研究所所報』10号、p76
- 4) 木内公一郎、増田榮美共著「短期大学生の職業意識の変化－ブライダル専門学生と司書課程学生の比較研究－」、H24.3、『観光文化研究所所報』10号、p61
- 5) 経済産業省『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査』平成22年6月、p10